Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-16

研究を通した成人女性の発達 ： 大学評価の新たな視点へ

安里，知陽

(Citation)
大学評価学会第16回全国大会 シンポジウム「研究・生活とともにある大学評価 ： 研究者の『多様な育ち』を支える大学のあり方を探る」,公開企画2:1-5

(Issue Date)
2019-03-02

(Resource Type)
conference object

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90005672

研究を通した成人女性の発達　―大学評価の新たな視点へ―

神戸大学大学院人間発達環境学研究科
安里知陽 yasuzato@art-niche.jp

2019 年、「人生 100 年時代構想会議」が官邸に設置された。ここではあらゆる人が活躍のチャンスを広げられる社会の実現を目指して、社会人の学び直しの重要性が検討されている。特に女性の就職や復職を目指した、学び直しの機会の充実が注目されている。

学び直しに関する政策では、大学の役割についても議論されている。特に女性の社会進出が急速に進む中、同時に女性個人においては社会的役割や女性としての在り方等、社会的役割期待などの変化にも巻き込まれている。このような女性個人が向き合う変化は、学び直し機会の充実を考える上で重要な視点である。これまでこのような視点で、成人女性の学び直しについて十分に議論されてきたとは言い難いのが現状である。本発表では、成人女性の社会的変化と個人的な発達に注目し、学び直しと成人女性の発達の関連性について発表者の実体験のエピソードをもとに考察し、成人女性の発達を支援する新たな大学評価の視点を提案する。

１．成人女性の学び直し

大学での学び直しの実態

文部科学省の調べでは、2014 年から 2017 年の間で男女合わせた大学の学士課程の社会人入学者は男女合わせて入学者全体のわずか約 2.5%である。大学院では学士課程に比べて全体の入学者数は少ないながらも、30 歳以上の社会人の割合は 17.5%である。社会人が学び直しにおいて利用したい公教育期間は、大学学士課程と大学院が 65.9%で、大学院はその内の 46.4%を占めている（職業能力開発総合大学校能力開発研究センター，2005）[i]。社会人の間では、学士課程より大学院の需要が高いが、その要因として高学歴化が関連しているとすれば、今後高学歴化がますます進めば、大学院への進学希望はさらに増加する可能性がある。社会人の学び直しは、時間や学習場所の利便性がかかせない。一方、大学では社会人を受け入れることに際して、週末や夜間授業などの対応が必要となることから、教員の配置や授業時間の確保など、特に国立大学では体制が整いにくいのが現状である。

女性の学び直しの実態

前述の大学院に関して、女性の入学率に限定したデータはないが、働く女性（n=658）の 66%が学び直しをしたいと思っているというデータがある。働く女性全体の内 4 割（n=256，平均年齢 47 歳）で学び直しを経験しており、現在の仕事や（再）就職等に関わるスキルアップ目的（248 名，93%，複数回答）以外にも、人生や生活の豊かさや充実を目的にしていることが示された(253 名，95.5%，複数回答)（ソフトブレーン・フィールド，2018）[ii]。女性が学び直しから得たものについて、仕事で役立つこと（44.2%）の他に、新たな世界が広がり、人生が豊かになったこと（36.2%）をあげ、国際交流、異世代の友人、新たな人脈の獲得と同時に、考えや生き方へポジティブな影響が指摘されている（同上，2018）。同様の調査で学び直しをしていないが興味がある人（n=883）の興味がある理由について、人生を有意義にしたという理由が一番多く、次いで上がったのが今後のキャリアアップのためという結果であった（シティリビングW

ｅｂ，2018）[iii]。女性は学び直しをすることで、キャリアのみならず自分の人生や生き方へのポジティブな影響を求める傾向が示唆される結果である。

２．成人女性の学び直しとアイデンティティ

では、なぜ成人女性が学び直しに対して、キャリアや生き方の変化を求めるのだろうか。成人女性の学び直しと、キャリアや生き方の変化欲求との関係はどのようなものなのだろうか。アイデンティティ研究では、30 代 40 代の成人女性は、個人志向性の発達が優位になることが示されている。同世代の男性は逆に社会志向性が上昇する（岡本，1999）[iv]。彼女によると、女性は 20 歳代までに関係性を確保し、関係性の中からアイデンティティを確立していくが、しだいに 30、40 歳代では個人志向が上昇し、個人的アイデンティティの確立が重要な課題となる傾向がある。しかし学び直しの調査結果から成人女性は、個人的アイデンティティの確立に不安を感じていることがこの世代のライフコースから読みとれる。

現在、女性の平均初婚年齢が 29.4 歳[v]、初産の平均年齢は 30.6 歳で[vi]あることから考えると、30 代 40 代で、結婚、出産、子育てを経験する女性が多い。多くの女性が結婚により名字を変更し、子育てにおいては名前ではなく「〇〇ちゃんのママ」などと呼ばれることになり、これまで自覚していた「自分」がうすれていく。このように個人志向性が高まる年代に入ると当時に、多くの女性が自分のこれまでのアイデンティティの喪失を経験することになる。このような喪失経験が、女性の個人的アイデンティティの不安定さを及ぼすことは十分考えられる。新しい名字や「〇〇ちゃんのママ」というのは、妻であり母であるという役割の自覚を獲得するが、この自覚的役割と個人的アイデンティティの確立とは必ずしも同じではない。むしろ、このような自覚的役割を拠り所とし、さらにそれらの役割を果たすためにも「自分」の見直しの必要性に直面する（岡本，1999）。同時にこの「自分」の変化、つまり個人的アイデンティティの再構築は、これまでのアイデンティティの不安定な状況を生み出すことにつながることが考えられる。このような個人的アイデンティティの再構築として、女性は学び直しを契機とし、自分がこれまでどう生きてこれからどう生きるのかというような自分らしい視点を模索することが考えられる。成人女性が学び直しを求めるのは、青年期から成人期へ、すなわち関係性の確保によるアイデンティティ構築から、関係性を足場とした「自分」という個人の確立への手段の一つとなり得るのではないだろうか。

３．成人女性の学び直しと大学評価

成人女性の大学院入学

先に社会人の大学での学び直しでは大学院への入学の割合が高いことを述べた。しかし、現実的には大学院に入学する成人女性は、まだまだ少ないのが現状である。成人女性を対象にしたアンケートには、大学や大学院の正規入学は選択肢にも上がっていない（ソフトブレーン・フィールド，2018）。一方で、近年芸能人の大学入学が取り上げられ、女性向け雑誌やネットでも働きながら大学学士課程や大学院へ入学した女性のインタビュー記事が取り上げられている（朝日デジタルなど）[vii]。例えばスポーツについて深めるために大学院のスポーツ科学研究科に入学した女性タレントが取り上げられ、インタビューでは仕事でスポーツ番組を担当することがきっかけになったことが語られていた（シティリビングＷｅｂ，2018）。芸能人だけではなく、一般の働く女性も仕事を続けながら大学院に入学する成人女性が、女性の学び直しの例

として取り上げられるなど、仕事を継続しながら大学院で学位の取得を目指す姿を働く女性の学び直しとして取り上げられること徐々に見られるようになった。

これらのいくつかの例では、仕事をしながら大学院で学位の取得を目指す女性が必ずしも昇格や、昇給、転職という現在の学び直し政策で議論されている仕事のステップアップという上昇志向的目的ではなく、仕事に関する知識や経験の広がりや深まり、自分のやりたいこと貫く生き方の追及というような個人志向的目的の大学院入学の体験も紹介されている[viii]。また、個人的志向目的の大学院入学では、修了後に継続してきた仕事への取組みの広がりだけではなく、転職など上昇志向へ転じることがある。また上昇志向的目的でも、大学院では資格取得のテスト勉強ではなく、研究活動を行うことになり自分の興味を広げたり新たな人脈を獲得したりするなど、個人志向的活動に触れることになる。つまり、個人的志向か上昇志向的かは峻別され得るものでもない。成人女性の学び直しで人気が高いのは、資格取得のための通信講座における学び直し等（シティリビングＷｅｂ，2018）である。しかし大学院での学び直しは、研究活動が中心となる点で特殊性がある。

大学院での研究活動と個人的アイデンティティの発達支援

仕事や子育ての役割をもちながら、他の学生と同じように研究することは、楽なことではない。上記のインタビューでは、成人女性の充実した大学院生活の体験談には、かならず大学教員の存在と教員から得た支援が語られている。個人的アイデンティティの確立を目指す 30 代 40 代の女性にとっては、転職や再就職などのステップアップ目的で当初入学しても大学院在学中に個人的アイデンティティの確立を目指すことに関心が高まることもあり得る。特に、研究活動が中心となる大学院では、自分の興味があるテーマは何か、なぜそのテーマを研究したいのか、どうして興味をもったのかなど、アイデンティティの再構築にかかせない「自分の視点」を確認することを継続的に行うことになる。研究活動が初めてである社会人を担当する大学教員には、社会人学生がこれまでの人生を通して培われた学生自信の持つ「自分の視点」に気づいていく支援をし続けることが求められているといえよう。したがって、成人女性の研究活動を指導する大学教員は、成人女性が持つ個人的アイデンティティという発達的課題に向き合いその達成を支援し、支援する大学教員により、大学は政府の掲げる「女性が輝く社会」の推進という役割を果たすことに繋がるのだ。

成人女性の学び直しの機会創出のための新しい大学評価

このように、女性の社会進出を促進し、女性の家庭や社会的な役割変化に適応する成人女性の学び直しにおいて、大学院に期待できる役割は非常に大きい。これまで述べてきたように、成人女性の大学院における学び直しにおいては、大学が提供するのは研究活動とその先にある学位である。しかし学位を目指す研究活動は、指導教員による成人女性の発達に関わる支援が欠かせない。したがって、大学評価においてもこのような観点からの評価基準の必要性があるのではないだろうか。また教員に対する評価基準においても、学生の論文数や修了年数など目に見える研究成果がクローズアップされ、目で見えにくい成果は見落とされやすい[ix]。しかし、子育てや仕事等、時間的制限がある中での研究においては、論文数や終了年数のような時間と密接に関係する成果以外の評価の検討も今後必要になってくると考えられる。

４．成人女性の大学院入学の効果（筆者の場合）

近年、ホームページやシンポジウムで、大学や大学院で学び直す女性に焦点をあてた事例紹

介が少しずつ増えている。2009 年にはシンポジウムで紹介された事例をまとめた書籍も紹介された[x]。しかし大学の実践においては、未だロールモデルの少なさが指摘されている。筆者も大学院で学び直しをしている一事例であることから、本シンポジウムにおいて、（ロールモデルというには忍びないが）大学院における成人女性の学び直しの一事例として筆者の経験を紹介する。

筆者は現在フルタイムの仕事と 2 年生と 5 年生の子を育てながら大学院で、高齢者の発達について研究している。大学院、また研究活動を通した私の変化を以下に振り返る。

１．女性としての変化：自分の人生を振り返る
２．母としての変化：子どもの悩みが和らぐ
３．仕事における変化：理論的と実践をつなぐ
４．社会人としての変化：これまで興味がなかった社会的な課題等に興味をもつ

１と２は共に、若い学生との平らな関係における成果であると感じている。20 歳の学部生から恋愛相談や進路相談を受けることで、自分の人生を振り返りながら今だから考えられる大人の選択を試みてアドバイスすることが時々ある。このことは、同時に自分の人生を振り返ることであり、女性としてのこれまでの生き方を考える機会になっている。また子育てにおいては、母として子どもへの接し方など大いに反省の毎日であるが、時にはそれらが罪悪感となって襲ってくるものである。このような時には、包み隠さず若い学生たちに子どもとしての意見を聞き、時には学び、時には罪悪感を和らげてもらっている。

３、筆者は絵画教室で高齢者に洋画を指導している。これまで仕事では経験だけが頼りであり、高齢者の発達のことなど考えることもなかった。しかし、研究を通して高齢者の学習や発達を学ぶことで、理論的な背景をもって教室の継続の意味を増幅できる学習環境を整え、学習成果の評価を行えるようになった。これは、講師としての自信とさらに自分の仕事に対する価値も上げてくれたと感じている。

４、これまで社会に対しては、自分が興味を持ったことにのみ注目するが、そうでないことに目を向けることが難しかった。例えば、自分の子どもが保育所に通っている時は、「こども園」や「幼保統廃合」などに関して、熱い目と思いを傾けたような筆者であるが、いざ自分の子どもが小学校に上がると、それらは「他の誰かの問題」になった。我が事ながら情けないが、本当のことである。しかし大学院で学位論文を仕上げる中で、興味のないことにも、探求心を持って注目する練習をしていると感じている。家入（2005）[xi]が指摘しているが、「学位論文は面白いことだけではなく、面白くないこともかかなければならない」ため、一見興味がなくても、調べるうちにあるいは書き進めるうちに面白さを発見することがある。このような経験のおかげで、もともと PTA 活動など興味のなかった筆者であったが、戦後の PTA 発足の流れや変遷を学んだお陰で、PTA 役員を引き受けることになった。また PTA のみならず、地域における成人の役割などについても学んだことで、外国人の子どもに日本語や算数を教えるボランティア等の地域活動にも参加するようになった。

このように、学び直しを大学院で行うことによって、さまざまな社会的役割を自覚し、さらに自分という個人のアイデンティティも模索するチャンスに恵まれていると感じている。

５．発表を終えて

本シンポジウムを通して、改めて筆者自身の「学び直し」や「大学院」,「研究」について考える機会をいただいたことに深く感謝している。

本発表では筆者自身の体験に基づく、筆者の視点における筆者の「学び直し」について分析した。したがって、例えば学び直しにおける「個人目的」や「社会目的」などを、天秤にかけて示せるものではないし、職業によっては社会的アイデンティティがすでに個人的アイデンティティと同化している人もいるなど、決して一般化できる内容ではないことを断わっておく。

また本発表では趣旨に従い、「成人女性」と「大学院」という特殊な条件に限った発表であった。しかし、社会全体または大学側から見ると、大学院を選択しない成人女性の学び直しや、大学院を選択する成人男性、高齢者等の存在を考慮する必要があり、大学評価においては本発表の条件は非常に偏ったものである。したがって大学評価においては、さらに多様な事例から検討する必要があり、実際の大学教員の指導においては多様性を尊重する柔軟な対応が求められる。したがって、本発表の一事例における個人的分析が貢献することは難しい。しかし今後の事例研究に批判や異論等の形でも、なんらかのきっかけとして少しでも貢献できたらと願う。

---

[i] 職業能力開発総合大学校能力開発研究センター調査報告書 N.128 平成 17 年 3 月，大学卒業以上の学歴を持つ社会人 1,761 人に対するアンケート調査

[ii] ソフトブレーン・フィールド,《働く女性》6 割以上が学び直しに関心あり。学び直しで、セカンドキャリアも豊かに。 2018/10/19 https://www.sbfield.co.jp/press/20181019-13451/ (2019 年 1 月 16 日取得)

[iii] シティリビングＷｅｂ，人生を豊かにするオトナの学び直し　リカレント教育，2018/7/11 http://city.living.jp/tokyo/f-tokyo/980998 (2019 年 1 月 16 日取得)

[iv] 岡本祐子,『女性の生涯発達とアイデンティティ―個としての発達・かかわりの中での成熟』, 1999

[v] **2015 年の厚生労働省統計情報部「人口動態統計」**

[vi] 厚生労働省平成 26 年人口動態統計月報年計(概数)の概況 http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai14/dl/gaikyou26.pdf

[vii] 朝日デジタル http://www.asahi.com/ad/clients/daigakuin/interview/ (2019 年 1 月 29 日取得)

[viii] 例えば Kaori Isomura ハフポスト日本版 blog,2018/6/5 (2019 年 1 月 29 日取得) https://www.huffingtonpost.jp/kaori-isomura/graduate-school_a_23448499/

[ix] 日本高等教育評価機構，平成 30 年度版　大学機関別認証評価　評価基準

[x] 須藤八千代・渋谷典子,『女性たちの大学院―社会人が大学院の門をくぐる時』, 生活書院，2009

[xi] 家入葉子,『文化系ストレイシープのための研究生活ガイド』, ひつじ書房，2005